

# 西原大塚遺跡第 169 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 2

埼玉県志木市教育委員会





志木市の文化財 第47集

# 西原大塚遺跡第 169 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 2

埼玉県志木市教育委員会

# はじめに

志木市教育委員会  
教育長 白砂 正明

ここに刊行する『西原大塚遺跡第 169 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、平成 22 年度に受託事業として、教育委員会が発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

西原大塚遺跡については、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。

特に、縄文時代中期の住居跡が 180 軒以上、また弥生時代後期から古墳時代の住居跡が 560 軒以上も見つかっており、それぞれの時代の拠点集落であったことがわかっています。

さて、今回報告する第 169 地点の調査内容ですが、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡 1 軒、掘立柱建築遺構 1 棟が見つかりました。

特に、掘立柱建築遺構については、機能や用途に未だ不明な点も多く、集落の中でどのような存在であったのか、近年でも議論的になっております。このような貴重な成果が得られ、志木市の歴史にまた新たな 1 ページを追加することができました。

今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた土木工事主体者並びに土地所有者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げる次第です。

# 例 言

1. 本書は、平成22年度に発掘調査を実施した、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡第169地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査として、工事主体者である個人から委託を受け、志木市教育委員会が調査主体者として実施した。
3. 本書の作成において、編集は徳留彰紀が行い、執筆は下記のとおりに行った。  
尾形則敏 第1章第1節  
徳留彰紀 第1章第2節、第2～4章
4. 遺物の実測・拓本は、村田浩美が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井 恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 表土剥ぎ作業及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託した。
6. 自然化学分析（炭化材樹種同定）については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

## 8. 調査組織

調 査 主 体 者 志木市教育委員会

教 育 長 白砂正明（平成20年4月～）

教 育 政 策 部 長 山中政市（平成21年4月～平成23年3月）

教 育 政 策 部 次 長 丸山秀幸（平成23年4月～）

生 涯 学 習 課 長 土岐隆一（平成21年4月～）

生 涯 学 習 課 主 幹 大熊克之（平成19年12月～平成22年12月）

松井俊之（平成23年1月～）

生 涯 学 習 課 主 査 尾形則敏（平成21年4月～）

生 涯 学 習 課 主 任 松永真知子（平成18年4月～）

〃 武井香代子（平成22年4月～）

生 涯 学 習 課 主 事 徳留彰紀（平成22年4月～）

志木市文化財保護審議会 神山健吉（会長）

井上國夫・高橋長次・高橋 豊・内田正子（委員）

## 9. 発掘作業及び整理作業参加者

### ○発掘作業

調査担当者 尾形則敏・徳留彰紀

調査員 深井恵子・青木 修

調査補助員 星野恵美子・鈴木浩子

発掘協力員 江口美千子・大橋康弘・林 ゆき子・一二三英文・松浦恵子・

増田千春・村田浩美

重機オペレータ 田中三二（株式会社大塚屋商店）

○整理作業・報告書刊行作業

調査員 深井恵子・青木 修

調査補助員 星野恵美子・鈴木浩子

整理協力員 村田浩美

10. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・

朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

江原 順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・斉藤 純・齋藤欣延・

斯波 治・渋谷寛子・鈴木一郎・照林敏郎・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・

前田秀則・松本富雄・柳井章宏・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

11. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については下記のとおりである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）／平成22年10月4日付け  
教生文第5－747号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）／平成23年2月10日 教生文第7－177号

## 凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行  
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡      T = 掘立柱建築遺構      P = ピット

# 目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境 .....	1
第1節 市域の地形と遺跡 .....	1
第2節 遺跡の概要 .....	7
第2章 発掘調査の概要 .....	11
第1節 調査に至る経緯 .....	11
第2節 発掘調査の経過 .....	12
第3章 検出された遺構と遺物 .....	13
第1節 弥生時代後期から古墳時代前期 .....	13
第2節 遺構外出土遺物 .....	17
第4章 調査のまとめ .....	18
[付編] 自然科学分析	
西原大塚遺跡第169地点出土炭化材の樹種同定 .....	21

図 版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布（1／20,000）	2
第2図	西原大塚遺跡の調査地点（1／5,000）	8
第3図	確認調査時の遺構検出状況（1／200）	11
第4図	遺構分布図（1／200）	12
第5図	32号住居跡（1／60）	14
第6図	32号住居跡出土遺物（1／3）	15
第7図	3号掘立柱建築遺構1（1／60）	16
第8図	3号掘立柱建築遺構2（1／60）	17
第9図	遺構外出土遺物（1／3）	17
第10図	西原大塚遺跡における掘立柱建築遺構の類例（1／120）	18

## 表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	西原大塚遺跡発掘調査一覧	9
第3表	西原大塚遺跡発掘調査報告書一覧	10
第4表	西原大塚遺跡第169地点出土炭化材の樹種同定結果	22

## 図 版 目 次

図版1	1. 調査区近景	2. 確認調査風景	3. 表土剥ぎ後風景	4. 遺構確認作業風景
	5. 調査区全景			
図版2	1. 32号住居跡	2. 32号住居跡炭化材出土状況	3. 32号住居跡土層断面A-A'	
	4. 32号住居跡区画整理第1地点	5. 3号掘立柱建築遺構		
図版3	1. 3号掘立柱建築遺構P1	2. 3号掘立柱建築遺構P1土層断面		
	3. 3号掘立柱建築遺構P2	4. 3号掘立柱建築遺構P2土層断面		
	5. 3号掘立柱建築遺構P3	6. 3号掘立柱建築遺構P3土層断面		
	7. 3号掘立柱建築遺構P4	8. 3号掘立柱建築遺構P4土層断面		
図版4	1. 3号掘立柱建築遺構P5	2. 3号掘立柱建築遺構P5検出状況		
	3. 調査区南西側近景	4. 1号ピット・2号ピット	5. 調査風景	
	6. 32号住居跡炭化材試料採取風景	7. 測量風景	8. 埋め戻し作業風景	
図版5	1. 32号住居跡出土遺物	2. 遺構外出土遺物		
図版6	西原大塚遺跡第169地点出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真			



# 第1章 遺跡の立地と環境

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km<sup>2</sup>、人口約7万1千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

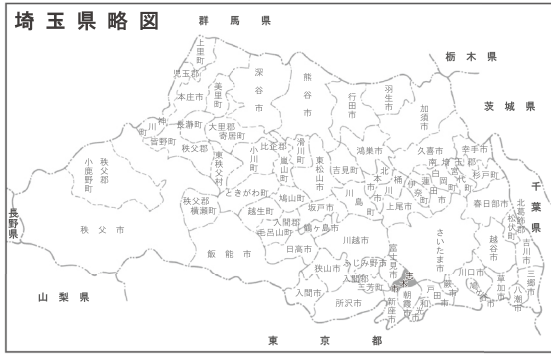
こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,360 m <sup>2</sup>	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	50,500 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m <sup>2</sup>	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m <sup>2</sup>	畑・宅地	貝塚・集落跡墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m <sup>2</sup>	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m <sup>2</sup>	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m <sup>2</sup>	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m <sup>2</sup>	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m <sup>2</sup>	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		477,900 m <sup>2</sup>					

平成23年12月28日 現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧





第1図 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)

平成23年11月30日現在

## (2) 歴史的環境

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13（2001）年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

平成20・21（2009・2010）年度には、今回の報告である城山遺跡第62地点の発掘調査が実施され、1ヶ所の石器ブロックが検出されている。

平成22（2010）年3月～5月に発掘調査が実施された城山遺跡第63地点では、5ヶ所の試掘坑を設定し調査を実施したところ、立川ローム層の第Ⅵ層を中心とする3ヶ所の石器集中地点が確認され、黒曜石の二次加工剥片・石核などが20点ほど出土している。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期中葉から後葉の遺構が集中し、城山貝塚周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒があげられる。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で黒浜式期、城山遺跡では諸磯式期の住居跡が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡や土坑が検出されている。特に西原大塚



遺跡では、現時点（平成24年1月）で170軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で検出された土坑1基があげられる。下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が550軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に7世紀前半から中葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、7世紀前半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

また、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点の調査を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。最新では、平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査により、平安時代の住居跡から皇朝十二銭の一つである「富壽神寶」<sup>ふじゆしんぼう</sup>が2枚出土しており、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点から、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『<sup>たてむらきゆうき</sup>館村旧記』(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『<sup>かいこくざつき</sup>廻国雑記』(註2)に登場する「<sup>おおいしなの</sup>大石信濃<sup>かみのやかた</sup>守館」が「柏の城」に相当し、「<sup>おおつかじゆうぎよくぼう</sup>大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう(神山 1988・2002)。

また、平成7(1995)年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8(1996)年度に発掘調査が実施された第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。また平成13(2001)年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。戦国期の資料としては、平成6(1994)年度に発掘調査が実施された第21地点から、<sup>よろい さね</sup>当市では初めて、鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14(1999～2002)年度に発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『<sup>たてむらきゆうき</sup>館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『<sup>たてむらきゆうき</sup>館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「<sup>しょうりんざんかんのんじだいいじゆいん</sup>松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

## 7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治2～5年)に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業が組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土している。

---

---

## 第2節 遺跡の概要

---

---

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町二～四丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西約1kmに位置している。北東―南西方向に約700m、北西―南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積163,930㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で8mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、概ね平坦である。遺跡西側中央、台地から低地へうつる斜面下に湧水点を確認されており、そこを中心に括れている。

昭和48年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元年から平成19年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。また、近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設などの各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。平成24年1月現在で、調査地点177、面積約53,000㎡（遺跡全体の約3割）に対して確認調査・発掘調査を実施している（第2図）。本遺跡で実施された調査地点のうち、発掘調査報告書が刊行された調査地点の概要を第2表に、本遺跡の発掘調査に係る文献については、第3表に示した。以下に検出された遺構・遺物の概要について示す。

旧石器時代では、石器集中地点が14ヵ所確認されている。これまでにナイフ形石器12点、尖頭器3点、錐状石器1点、搔器1点、石核8点、剥片149点、碎片349点、礫306点が出土している。第5号石器集中地点で安山岩製のナイフ形石器が立川ロームⅧ層上部から出土している他は、Ⅲ層～Ⅴ層上部からの出土が大半を占める。また、第8・10・11A・12号石器集中地点では礫群が検出されている。

縄文時代草創期では、表面採集で長さ11.9cmの両面調整石器1点を確認されている（文献No.2）。早期では、条痕文系土器を伴う炉穴15基が遺跡北西隅を中心に検出されている。前期では、黒浜式期の住居跡2軒、諸磯C式期の土坑1基が遺跡南西隅に分布している。中期では、遺構数が増大し、勝坂式期から加曾利E式期の住居跡181軒が環状集落を形成している。後期では、堀之内式期の住居跡1軒、加曾利B式期の住居跡1軒が遺跡北西隅に検出されている。晩期では、遺構外遺物として安行3式土器が遺跡北西隅で出土しているが、遺構は検出されていない。遺物では、50号住居跡出土の硬玉製大珠（文献No.23）、108号住居跡出土の顔面把手付土器（未報告）などが特筆される。

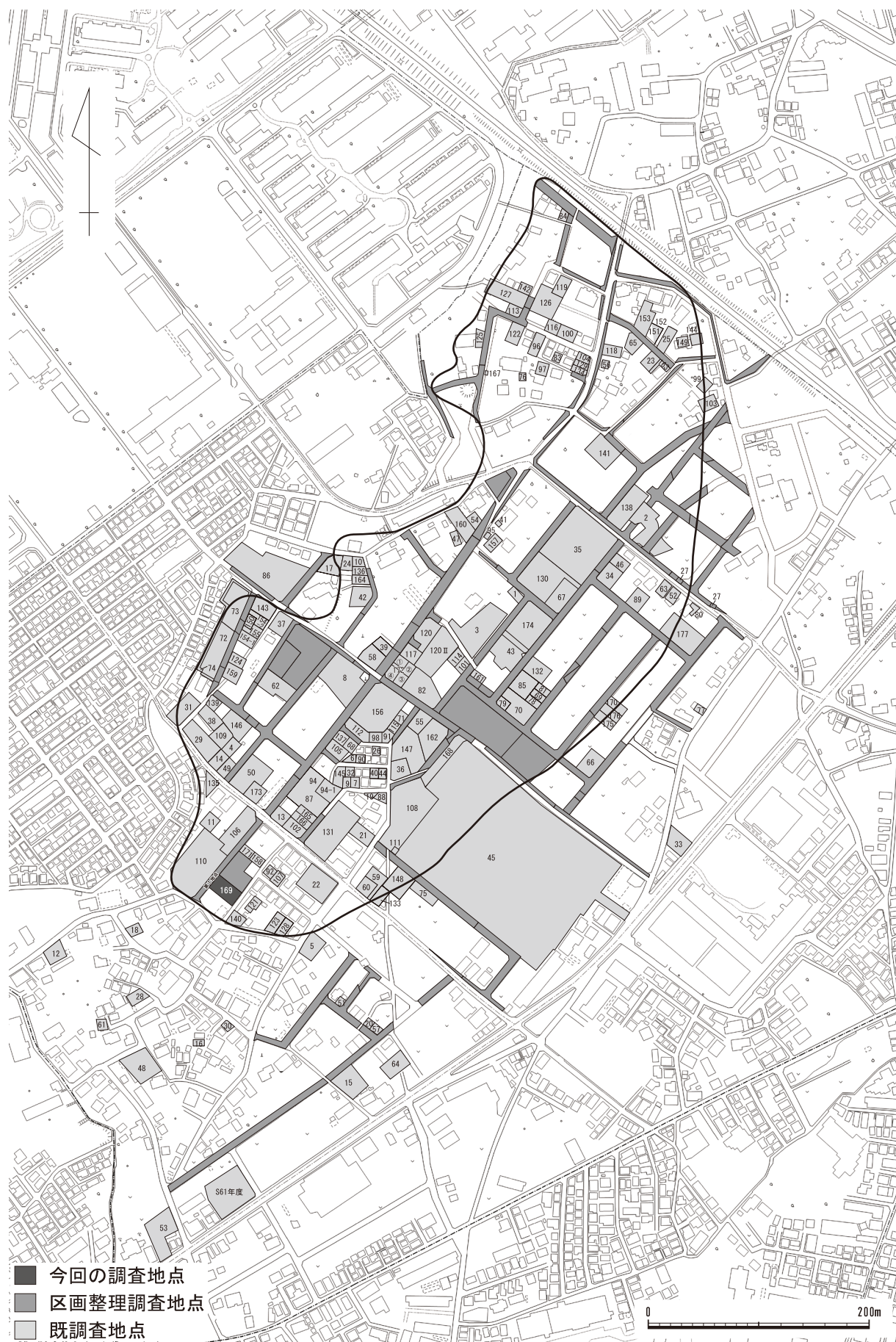
弥生時代では、前期から中期が空白期となり、後期から古墳時代前期では住居跡568軒、掘立柱建築遺構3棟、方形周溝墓34基が検出されており、大規模集落の様相を呈している。遺物では、122号住居跡出土のイヌ形土製品（文献No.23）、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓出土の鳥形土製品（文献No.15）などが注目される。

古墳時代では、中期が空白期となり、後期で住居跡10軒が検出されている。また、本遺跡内北東に塚の山古墳が所在するが、近接する道路部分の調査でも周溝が不検出であるため、詳細は不明である。

奈良・平安時代では、住居跡13軒が検出されている。本遺跡では、8世紀前葉に比定される19号住居跡が最古の資料となる。

中近世では、地下式坑を含む土坑155基、井戸跡7基、配石遺構1基が検出されている（文献No.23）。以上、本遺跡は旧石器時代から近世に至るまでの複合遺跡であることが判明している。





第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)

調査地点	面積 (㎡)	発掘調査期間	調査原因	遺 構 の 概 要	第3表文献No.
第1地点	112.50	昭和48年8月3日 ～12日	学術調査	縄文中期(住居跡5軒、土坑8基)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.1
第2地点	940.00	昭和55年7月20日 ～8月21日	学術調査	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.2
第3地点	439.00	昭和58年8月23日 ～9月8日	共同住宅	縄文中期(住居跡5軒、土坑2基)	No.3
第4地点	105.00	昭和62年1月5日 ～11日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.4
第6地点	64.32	昭和62年11月18日 ～20日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.5
第7地点	77.44	昭和63年1月20日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(小竪穴状遺構1基)、時期不詳(土坑1基、溝跡1本)	No.7
第8地点	1,227.00	昭和63年3月16日 ～8月6日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡1軒、土坑24基)、弥生後期～古墳前期(住居跡13軒、方形周溝墓1基、掘立柱建築遺構1棟)	No.6
第9地点	75.86	昭和63年8月18日 ～9月10日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	
第10地点	80.54	昭和63年8月27日 ～10月4日	個人住宅建設	縄文中期(土坑4基、遺物包含層)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	
第11地点	220.84	平成元年5月16日 ～25日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(方形周溝墓1基)	No.8
第14地点	129.00	平成2年5月26日 ～6月11日	共同住宅	弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.10
第21地点	265.73	平成3年5月28日 ～29日	事務所併用住宅	弥生後期～古墳前期(方形周溝墓1基)	No.10
第32地点	60.11	平成6年4月7日 ～14日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)	No.9
第34地点	317.00	平成7年8月4日 ～9月1日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡3軒、土坑6基)、弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)、奈良・平安(住居跡1軒)	No.11
第36地点	248.05	平成8年10月15日 ～26日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.13
第37地点	220.00	平成9年4月8日 ～6月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡7軒)、時期不詳(土坑4基)	No.14
第39地点	63.76	平成9年8月5日 ～28日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡3軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、方形周溝墓1基)	No.14
第43地点	779.60	平成12年1月11日 ～3月24日	農地転用	縄文中期(住居跡10軒、土坑22基)、弥生後期～古墳前期(住居跡9軒)、古墳(1軒)	No.16
第45地点	5,642.42	平成11年8月3日 ～12月24日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡72軒、方形周溝墓1基)、古墳後期(住居跡2軒)	No.15
第47地点	86.12	平成12年4月3日 ～4日	個人住宅建設	縄文中期(土坑1基)、弥生後期～古墳前期(溝跡1本)	No.17
第54地点	90.74	平成13年9月13日 ～14日	物置建設	縄文中期～後期(土坑7基)、弥生後期～古墳前期(方形周溝墓1基)	No.18
第65地点	115.93	平成14年7月25日 ～8月9日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.19
第67地点	456.20	平成14年9月9日 ～11月29日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡8軒、土坑8基)、弥生後期～古墳前期(住居跡8軒、掘立柱建築遺構1棟、土坑1基)	No.22
第108地点	684.60	平成21年2月23日 ～4月14日	コミュニティ機能を持つ複合施設建設	縄文中期(住居跡1軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡15軒)	No.28
第110地点	500.00	平成17年2月7日 ～3月10日	集合住宅建設	旧石器(石器集中2カ所)、縄文中期(土坑1基、集石1基)、弥生後期～古墳前期(住居跡7軒)	No.21
第111地点	80.00	平成17年1月17日 ～1月21日	消防車庫建設	古墳前期(住居跡1軒)	No.20
第113地点	119.75	平成17年2月4日 ～15日	個人住宅建設	縄文早期(炉穴1基)、近世以降(土坑16基)	No.26
第120-1地点	460.56	平成17年6月27日 ～7月7日	保育園建設	縄文中期(住居跡1軒、土坑62基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒、方形周溝墓1基)	No.25
第120-2地点	566.55	平成18年5月30日 ～6月28日			
第124地点	150.02	平成17年12月19日 ～平成18年1月13日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.26
第131地点	472.21	平成18年8月30日 ～9月20日	集合住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒、方形周溝墓5基)	No.25
第137地点	100.00	平成18年11月9日 ～15日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1)、時期不詳(ピット5本)	No.27
第138地点	20.00	平成19年2月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(溝跡1本)	No.24
第154地点	120.02	平成20年3月17日 ～19日	分譲住宅軒建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)、奈良・平安(住居跡1軒、ピット1本)、中世以降(土坑1基)	No.24
第155地点	120.00	平成19年3月18日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1)	No.27
区画整理	38,242.39	平成元年12月20日 ～平成19年1月12日	区画整理事業	旧石器(石器集中12カ所)、縄文早期(炉穴13基)、縄文前期(住居跡2軒、土坑1基)、縄文中期(住居跡101軒、土坑233基、集石13基)、縄文後期(住居跡2軒、土坑9基)、弥生後期～古墳前期(住居跡362軒、方形周溝墓22基)、古墳後期(住居跡6軒)、奈良・平安(住居跡7軒)、中近世(土坑155基、井戸跡6基)	No.12 No.23
第169地点	90.00	平成22年10月4日 ～13日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、掘立柱建築遺構1棟)	本報告

第2表 西原大塚遺跡発掘調査一覧



第1章 遺跡の立地と環境

No.	書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
1	西原・大塚遺跡 発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上國夫・落合静男 谷井 彪・宮野和明
2	志木市史 原始・古代資料編	1984	志木市史	志木市	宮野和明・井上國夫 小久保徹
3	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点 発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
4	新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点 発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
5	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
6	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
7	西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点 発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
8	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
9	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏・ 深井恵子
10	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
11	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
12	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998	—	志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
13	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
14	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
15	西原大塚遺跡第45地点 発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳・上田 寛
16	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊・ 内野美津江
17	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊・ 深井恵子
18	志木市遺跡群13	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
19	志木市遺跡群14	2004	志木市の文化財第36集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子・ 青木 修
20	西原大塚遺跡第111地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第8集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
21	西原大塚遺跡第110地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第9集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
22	志木市遺跡群15	2006	志木市の文化財第37集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
23	西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書	2009	志木市遺跡調査会調査報告第13集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川佳幸
24	西原大塚遺跡第138地点 西原大塚遺跡第154地点 埋蔵文化財 発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第14集	志木市遺跡調査会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
25	西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第15集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
26	志木市遺跡群17	2008	志木市の文化財第39集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
27	志木市遺跡群18	2009	志木市の文化財第41集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
28	西原大塚遺跡第108地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2009	志木市の文化財第42集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 坂上直嗣・青池紀子 他

第3表 西原大塚遺跡発掘調査報告書一覧

〔註〕

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

〔引用文献〕

神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号  
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成22年8月、土木工事主体者兼土地所有者である個人より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。土木工事の計画は、志木市幸町四丁目8132の一部（302.94㎡）内に共同住宅建設を行うものである。

教育委員会は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、概ね下記のとおり回答した。

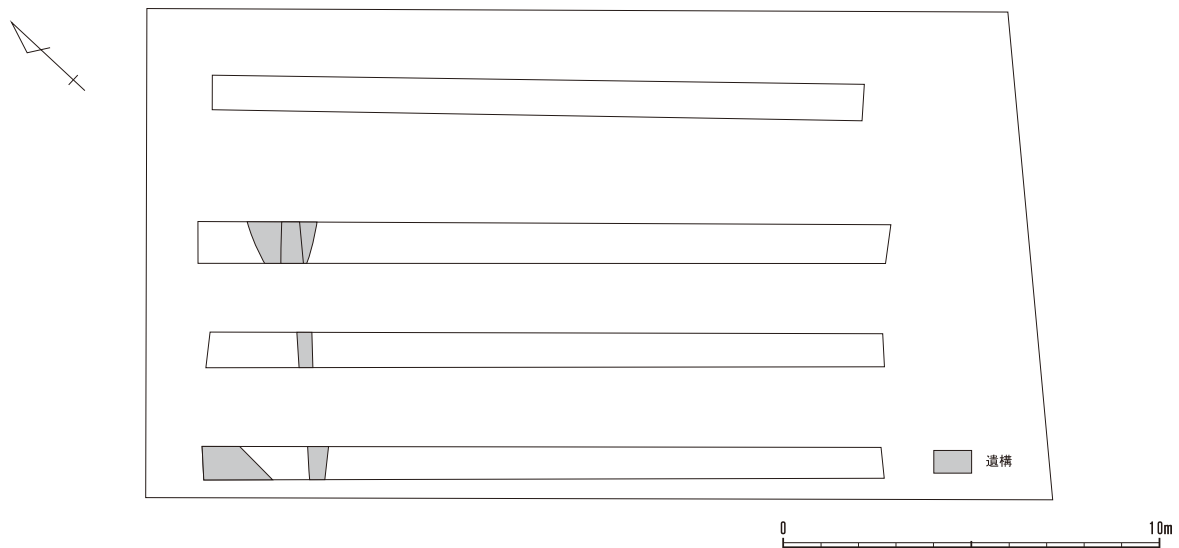
1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施した上で、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 確認調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、保存措置を講ずること。また、現状保存及び盛土保存が不可能である場合については、記録保存（発掘調査）を実施する必要があること。

同17日、教育委員会は、確認調査依頼書を受理し、9月7日に確認調査を実施した。調査区の長軸方向にトレンチを4本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の炉穴1基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡1軒、時期不明の溝跡1本を確認した（第3図）。

同15日、教育委員会は工事主体者に確認調査の結果を報告し、同時に埋蔵文化財の保存措置を要請した。その結果、駐車場部分（90.00㎡）については保護層が確保できないため記録保存、宅地部分（212.94㎡）については保護層を確保できるため盛土保存として、それぞれ取り扱うこととした。

同24日、教育委員会は、土木工事主体者から提出された志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書を受理し、土木工事主体者と事前協議を実施した。同日、土木工事主体者と志木市（志木市長 長沼明）の間で、埋蔵文化財保存事業に係る協議書を取り交わし、同27日、委託契約を締結した。

以上により、教育委員会を調査主体に、平成23年10月4日より発掘調査を実施した。



第3図 確認調査時の遺構検出状況（1／200）

## 第2節 調査の方法と経過

平成22年10月4日 重機による表土剥ぎ作業を実施する。

10月5日 器材搬入等、調査区の整備を行う。その後、遺構確認作業の結果、縄文時代の炉穴1基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡1軒、時期不詳の溝跡1本、ピット数本を確認。調査区全体に、南北方向に延びる幅15cm程度の溝状耕作痕による攪乱が確認された。

弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡は、西原土地区画整理事業に伴う道路部分の発掘調査（区画整理第1地点）で一部が調査済みであった32号住居跡（32 Y）であることを確認し、精査を開始した。時期不明の溝跡については、畝状耕作痕を切っていたため、近代以降の堀込みと判断し、記録化は行わないことにする。ピットの精査を開始する。

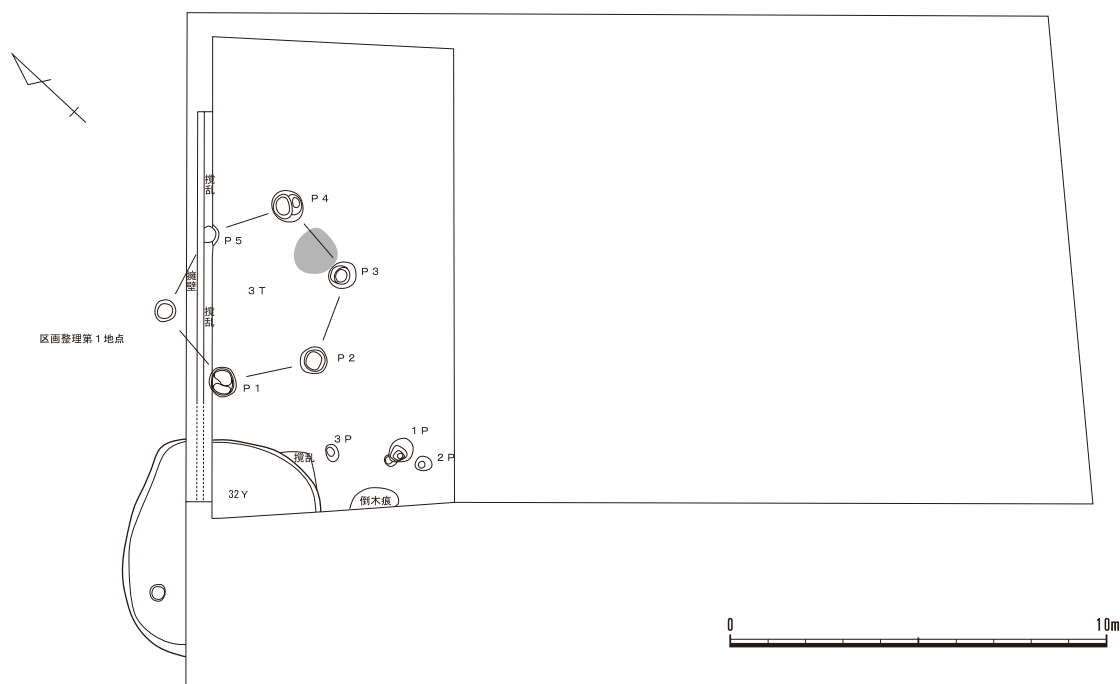
10月6日 引き続き32 Yの精査を実施する。僅少ではあるが遺物が出土した。調査区中央西側に確認された複数のピットについて、分布と覆土断面を検討した結果、同一遺構のものと判断し、3号掘建柱建築遺構（3 T）として取り扱うこととする。

10月7日 32 Yの床面を検出した。床面直上から炭化材が出土したため、出土状態の平板測量及び写真撮影、試料採取を行った。覆土の分層、写真撮影及びセクション図の作成を行った。

10月8日 32 Yの完掘写真を撮影し、遺構の平板測量を行った。32 Yの精査を完了する。3 Tに伴うピットが5本であることを確認した。確認調査時に検出した縄文時代の炉穴の精査を開始したが、出土遺物もなく、形態が捉えられず、また炉床を確認できなかったため、炉穴とは判断できなかった。焼土の平面的な広がりを記録し、精査を終える。

10月12日 3 Tを完掘した。完掘写真を撮影し、平板測量を行い、エレベーション図を作成した。本日で精査を終了する。器材の搬出を行う。

10月13日 重機による埋戻し作業を行う。簡易トイレの撤去を行う。本日で発掘作業を終了する。



第4図 遺構分布図（1／200）

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 弥生時代後期から古墳時代前期

#### (1) 概要

遺構は、弥生時代後期末葉から古墳時代前期の住居跡1軒(32Y)、掘立柱建築遺構1棟(3T)を検出した。遺物では、32Yから土器破片と炭化材が出土した。3Tからの出土遺物はない。また、ピット3本(1～3P 図版4-3・4)を検出した。出土遺物はないが、覆土の観察から当該期と判断した。

なお、32Yは、一部を区画整理第1地点で調査・報告済みであるが、それらの資料についても遺構・遺物ともに追加・変更を加え、改めてここに報告する。

#### (2) 住居跡

##### 32号住居跡

##### 遺 構 (第5図)

[位 置] 調査区北西端、3号掘立柱建築遺構の南西に位置する。

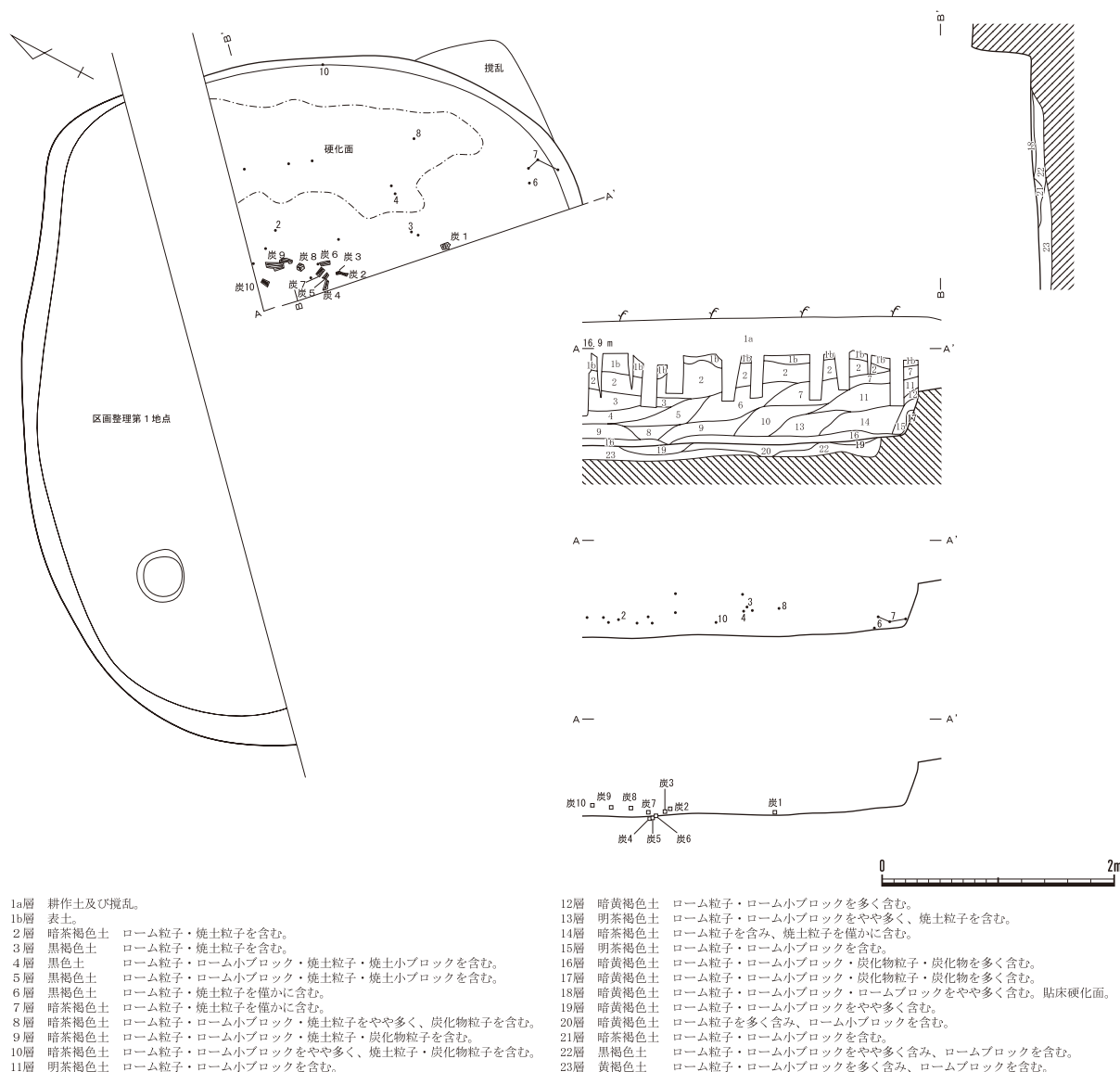
[検出状況] 表土剥ぎ後の遺構確認作業で検出した。西原土地区画整理事業に伴う道路部分の発掘調査(区画整理第1地点)で西側の一部を調査済みである。今回の調査では、住居全体の北東側1/4程度を検出した。東西方向に延びる溝状耕作痕(幅15cm程度、遺構確認面からの深さ10～20cm程度)によって、壁面及び覆土上層が攪乱を受ける。覆土中層以下及び床面の遺存状態は良好である。

[構 造] 平面形：住居南西1/4程度が調査区外であるため判然としないが、丸みの強い隅丸長方形を呈すると考えられる。規模：長軸5.8m/短軸不明/遺構確認面からの深さ51cm、掘込み面からの深さ65cm(A-A')。壁：48～51cm。70～80°でやや直線的に立ち上がる。主軸方位：未調査部分を残しており不明。東に60°程度傾くか。壁溝：検出されなかった。床面：平坦であるが、中央がやや窪むか。住居周縁部に硬化面を検出した。貼床は10～12cmの厚さで施されていた。掘り方は壁際を残して中央部分がやや深い。炉：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。区画整理第1地点の調査部分では住居西コーナーに1本(床面からの深さ19cm)確認されている。入口施設：検出されなかった。

[覆 土] 22層に分層した。暗茶褐色土や黒褐色土を基調とし、やや黒味の強い覆土である。16層を中心とした床面直上から炭化材を検出した。貼床は、中央部分が暗黄褐色土を基調とし、壁際は黒色土を基調とする。

[遺 物] 出土した遺物は少なく、覆土中層から上層にかけて壺形土器や甕形土器などの破片12点が出土し、そのうち7点を図示した。区画整理第1地点で出土した土器片4点も今回改めて報告することとする。また、住居中央床面直上から出土した炭化材について試料採取を行い、樹種同定を行った結果、コナラ属クヌギ節であることが判明している([付編] 自然科学分析 参照)。

[時 期] 弥生時代後期末葉から古墳時代前期。



第5図 32号住居跡（1／60）

〔所見〕 床面直上から炭化材が出土したことから、焼失住居と考えられる。

遺物（第6図）

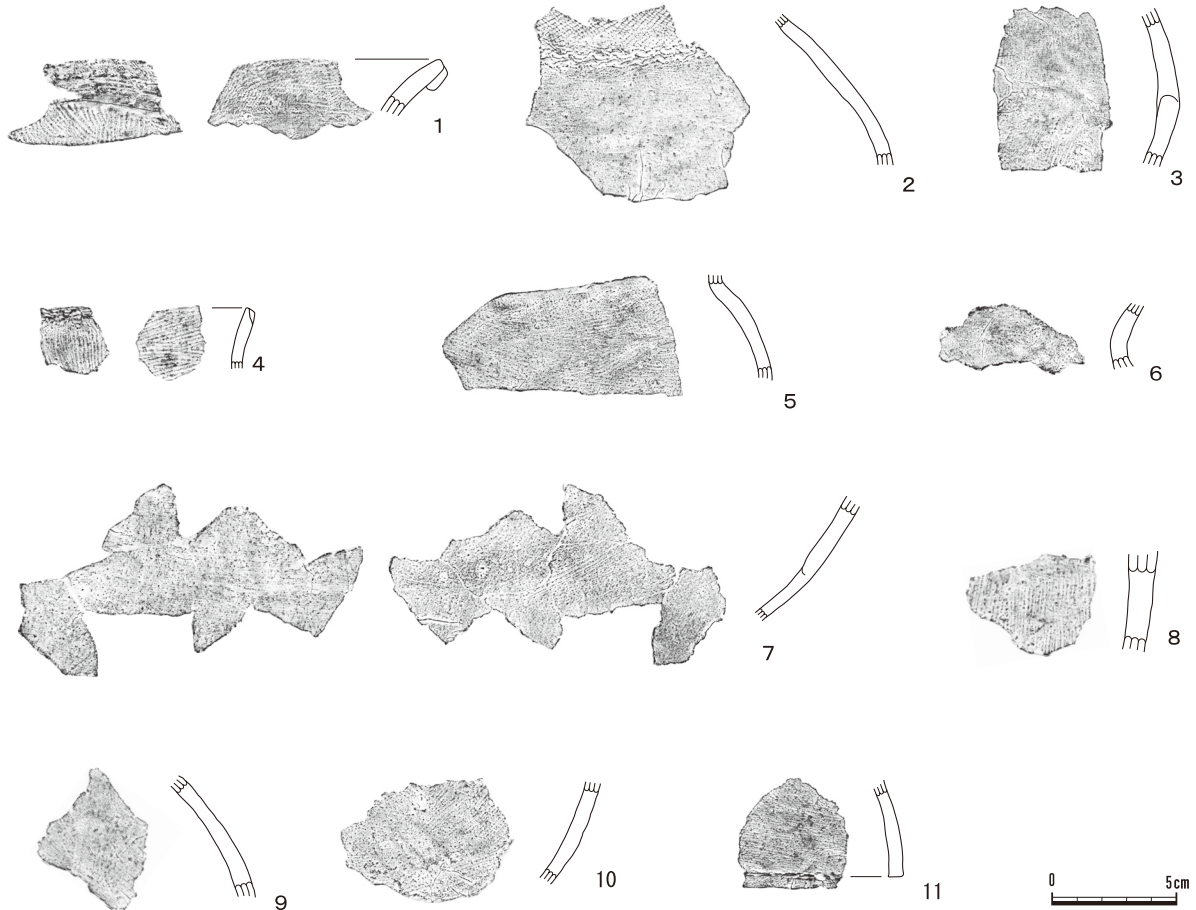
区画整理第1地点分として土器片4点が既に報告されている。今回の報告では、土器片7点が追加資料となり、合わせて11点の提示となる。なお、既報告資料は1・5・9・11である。

〔土器〕（第6図）

1は幅狭の複合口縁をもつ壺形土器の口縁部破片。外面は、縦方向のハケ目調整後に幅狭複合部が貼付され、複合部上には横方向にハケ目調整が施される。内面は、横方向のハケ目調整後、端末に結束が施された単節LRが横位方向に施文され、以下はヘラ磨き調整がなされる。赤彩は、外面は全面に、内面は口縁部上端は径1cmの円形赤彩文が、S字状結節文以下は全面的に施される。胎土に細礫を含む。

2は壺形土器の胴部破片。単節LRが横位に施文され、自縄結節文により区画される。S字状結節文以下はヘラ磨きが横方向に施される。内面は指頭押捺痕が確認できる。赤彩は、外面のS字状結節文以下に施される。胎土に細礫・白色粒子・橙色粒子を含む。





1・5・9・11は区画整理第1地点出土

第6図 32号住居跡出土遺物（1／3）

3は壺形土器の胴部破片。外面は縦方向のハケ目調整後、縦方向にヘラ磨き調整がなされる。内面は、横方向にナデ調整が施される。胎土に細礫・橙色粒子・白色粒子を含む。

4は甕形土器の口縁部小破片。外面は縦方向に、内面は横方向にハケ目調整が施される。口唇部は、横方向のハケ目調整後、ハケ状工具の端部による刻目が施される。胎土に細礫を含む。

5は甕形土器の頸部から胴部破片。外面はハケ目調整が斜方向に施される。内面はナデ調整が横方向に施される。白色粒子・橙色粒子・黒色粒子を含む。

6は甕形土器の頸部破片。内外面に目の細かいハケ目調整が施される。胎土に細礫・橙色粒子を含む。

7は甕形土器の胴部破片。内外面は横方向にハケ目調整が施される。胎土に細礫・橙色粒子を含む。

8は甕形土器の胴部破片。外面は縦方向にハケ目調整が、内面は横方向にヘラナデ調整が施される。胎土に細礫・橙色粒子・白色粒子を含む。

9は甕形土器の胴部破片。外面はハケ目調整が、内面は横方向にヘラナデ調整が施される。胎土に細礫・橙色粒子を含む。

10は甕形土器の胴部破片。外面はハケ目調整、内面はヘラナデ調整が施される。胎土に細礫を含む。

11は台付甕形土器の脚部破片。外面は細かいハケ目調整、内面はナデ調整が横方向に施される。底部は面取りがなされ、細かいハケ目調整が施される。胎土に細礫・白色粒子を含む。

### (3) 掘立柱建築遺構

#### 3号掘立柱建築遺構

##### 遺 構 (第7・8図)

[位 置] 調査区西側中央、32 Yの北東側に位置する。

[検出状況] 表土剥ぎ後の遺構確認作業時に検出した。柱穴それぞれの規模や位置関係、覆土の観察から、掘立柱建築遺構として取り扱うこととした。全ての柱穴が南北方向に延びる溝状耕作痕による攪乱を受けており、特にP5については擁壁工事の際に大部分が壊されていた。なお、区画整理第1地点の調査で検出された柱穴についても、規模や位置関係から本遺構に伴うものとして取り扱うこととした。

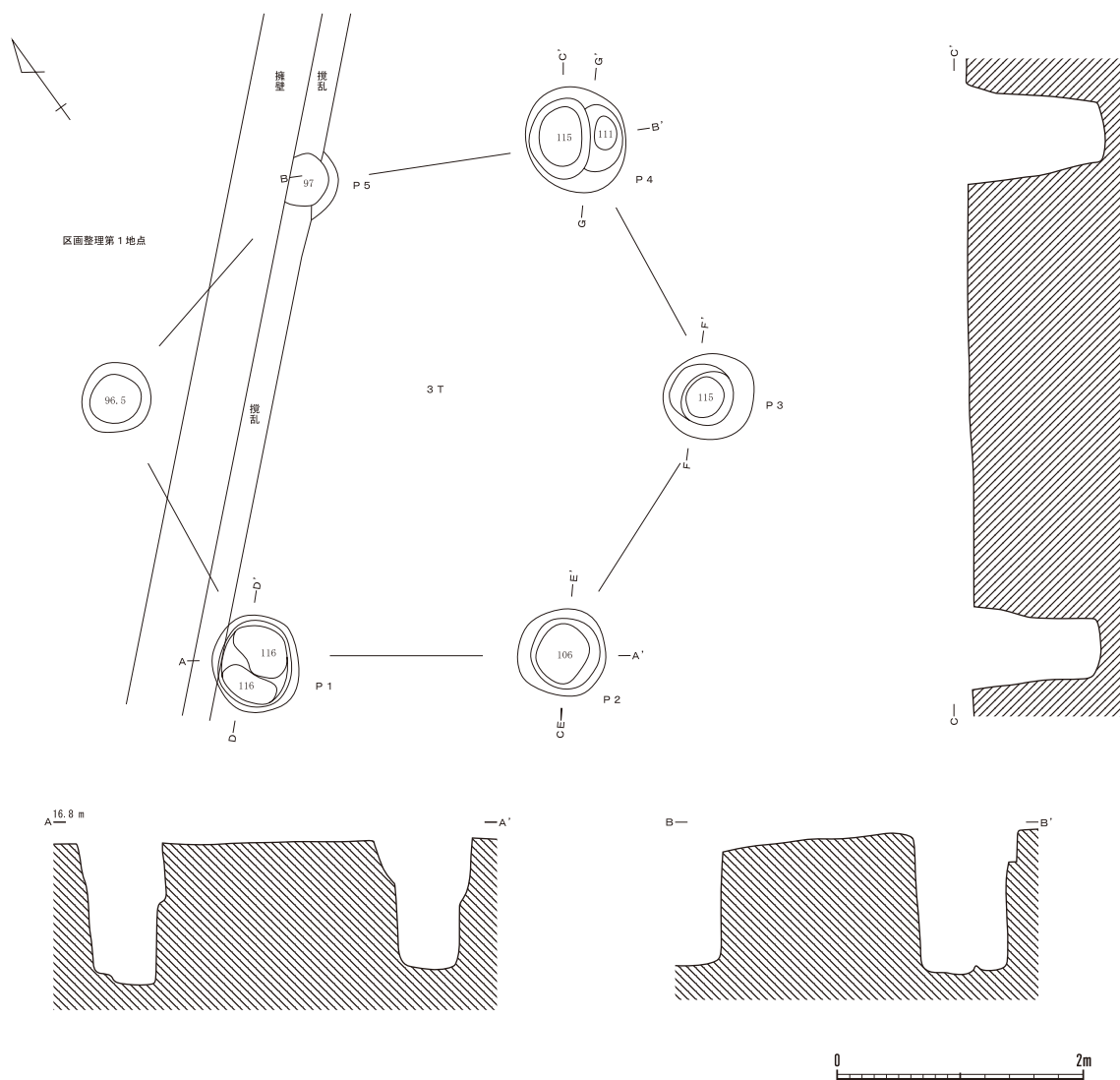
[構 造] 平面形：柱穴6本が亀甲形に並ぶ。規模・柱穴：直径60～80cm、遺構確認面からの深さ96.5～116cm、柱穴間距離2.3～2.5m。主軸方位：不明。入口施設：検出されなかった。

[覆 土] P1～P4については、柱の痕跡が確認できた。また、柱脇の覆土は、黒色土層とローム層が交互ないし混合して堆積している状況が確認できた。

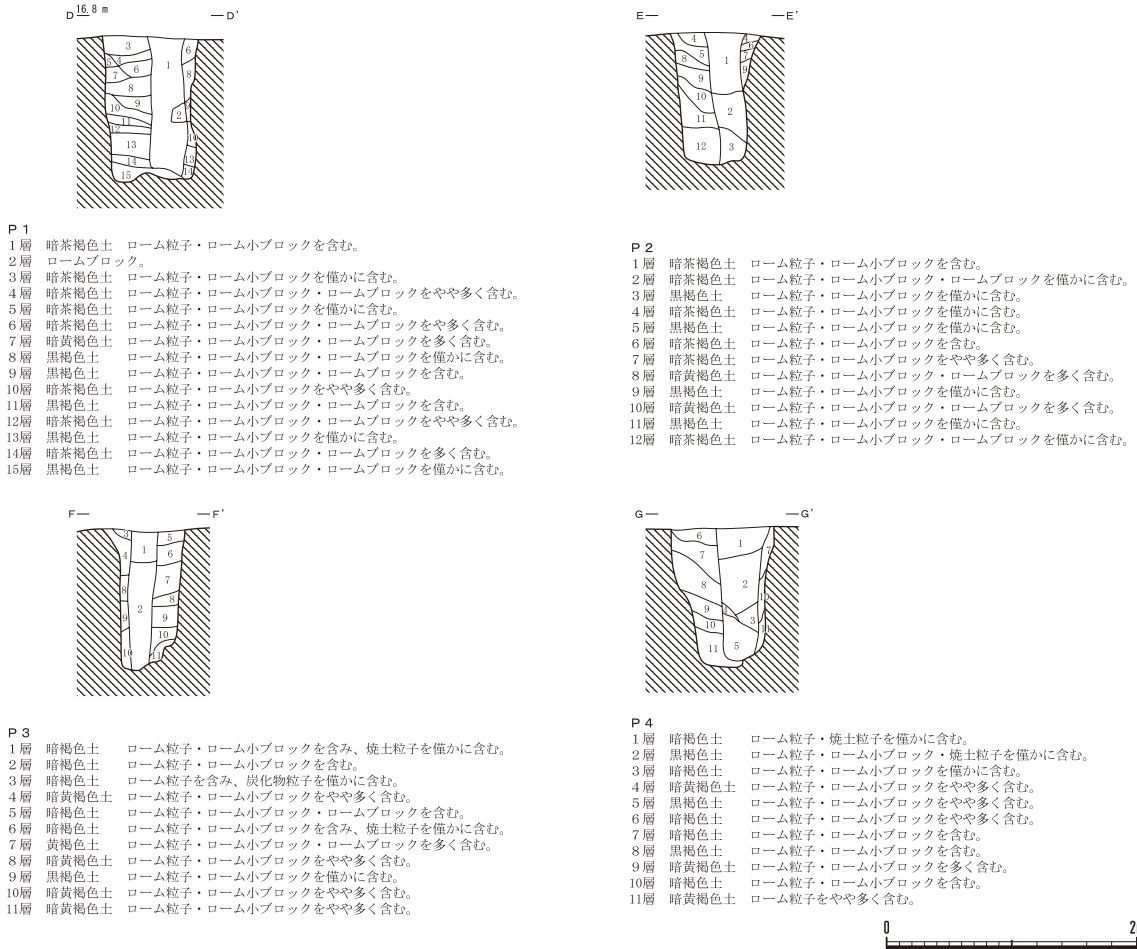
[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 形態から弥生時代後期末葉から古墳時代前期。

[所 見] 覆土の観察から、柱の抜去はなされなかったと考えられる。



第7図 3号掘立柱建築遺構1 (1/60)



第8図 3号掘立柱建築遺構2 (1/60)

## 第2節 遺構外出土遺物

ここでは、表土及び攪乱中出土の遺物に加え、混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱うこととする(第9図・図版5-2)。

1は阿玉台I b~II a式の胴部破片。断面三角形の隆帯によって区画文が描かれる。区画文内側の隆帯脇には竹管状工具の押引による結節沈線が沿う。

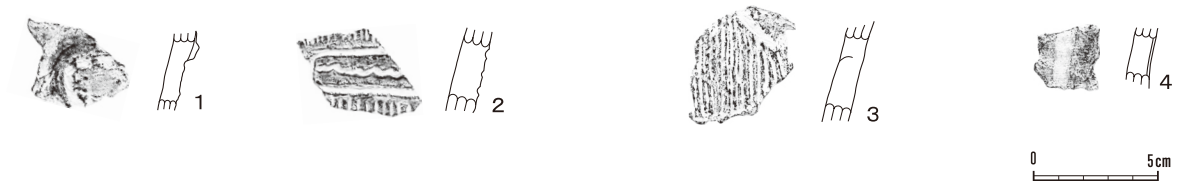
2は勝坂式の胴部破片。押圧文と沈線による区画文内には、波状文が描かれる。

3は連弧文式の胴部破片。地文条線の器面に弧線が描かれる。

4は加曾利E 3式の胴部破片。磨消部に幅広で浅い沈線が垂下する。

5は陶器皿の口縁部破片。外面は緑釉、内面は透明釉。胎土は淡黄褐色を呈する。唐津系。17世紀。

6は焙烙の口縁部~底部破片。内外面鉄釉。胎土は淡茶褐色で、砂粒・雲母を含む。在地系。近世。



第9図 遺構外出土遺物 (1/3)



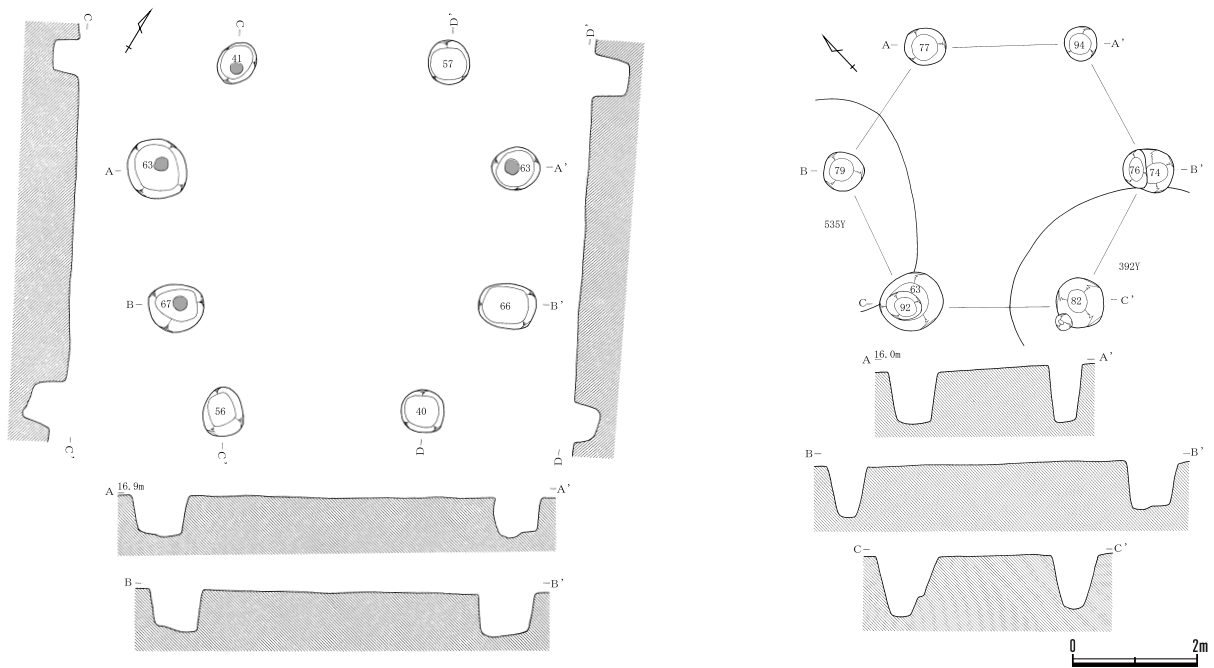
## 第4章 調査のまとめ

本遺跡における掘立柱建築遺構については、今回検出された3 Tの他、1 T（尾形 1990）と2 T（尾形 2007、佐々木 2009）が検出されている（第10図）。

編年的には、これら六角形や八角形の亀甲形を呈する掘立柱建築遺構は、南関東の弥生時代後期から古墳時代初頭期に位置づけられている（及川 2009）。3 Tと形態・規模が酷似する2 Tが392 Yの貼床下から検出されたことは、年代の上限を設定する上で重要な層位的資料となるだろう（尾形 2007）。

上屋構造に関しては、亀甲形の掘立柱建築遺構は棟持柱を持つ建物跡である可能性が示される一方で、2 Tや3 Tのように柱間が極めて近似している事例については、円形の建物跡ではないかという指摘もある（及川 前出）。土層断面の観察に加え、文献史学、建築学などを含めた総合的な考察が必要である。

集落内での位置付けに関しては、竪穴住居跡に比して検出事例が少ないことや、集落内での位置関係などが着目され、「数軒からなる住居群に対して1棟」という在り方などが想定されている（坂上 2009）。今後、竪穴住居跡や環濠を含めた集落の変遷や構造と合わせて検討していくべき問題である。



1号掘立柱建築遺構

2号掘立柱建築遺構

第10図 西原大塚遺跡における掘立柱建築遺構の類例（1 / 120）

### [参考文献]

- 尾形則敏 1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会  
 尾形則敏 2007『志木市遺跡群15 西原大塚遺跡第67地点』志木市の文化財第37集 埼玉県志木市教育委員会  
 及川良彦 2009「掘立柱建物跡概観—亀甲形をどうみるか—（弥生時代の東京都事例を中心に）」『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論文集』青山考古第25・26号合併号 青山考古学会 田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会  
 坂上直嗣 2009「第3節 弥生時代」『東京都 渋谷区 鶯谷遺跡』大成エンジニアリング  
 佐々木保俊 2009『西原大塚遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市遺跡調査会

[付 編]

自然科学分析



# 西原大塚遺跡第169地点出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

西原大塚遺跡は志木市幸町に所在し、武蔵野台地北東端部の柳瀬川と新河岸川を望む台地上に立地する、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。第169地点の調査では弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が検出され、住居跡内より炭化材が出土した。ここではこれら出土炭化材の樹種同定を行なった。

## 2. 試料と方法

試料は、弥生時代後期の32号住居跡から出土した10点の炭化材である。確認できる試料については、残存半径と残存年輪数の記録を行なった。残存半径は試料で残存している半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について断面を作製し、整形してカーボンテープで試料台に固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。なお同定試料の残りは、志木市教育委員会に保管されている。

## 3. 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）が10点産出した。残存年輪数の計測では、残存半径3.2cm内に7年輪みられた試料No. 7のクヌギ節のように残存半径に対して年輪数が少ない試料もみられたが、ほとんどの試料は残存半径5.5cm内に25年輪みられた試料No. 9のクヌギ節のように残存半径に対して年輪数がやや多かった。同定結果を第4表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、各樹種の走査型電子顕微鏡写真を示す。

- (1) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版1 1 a - 1 c (No. 9)・2 a (No. 2)・3 a (No. 3)・4 a (No. 6)・5 a (No. 7)・6 a (No. 9)・7 a (No. 10)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

## 4. 考察

弥生時代後期の32号住居跡では、同定した10点すべてがクヌギ節であった。いずれも建築材であったと考えられている。クヌギ節は重硬で強靱な材質を持つ樹種で、割裂性が良く、武蔵野台地の弥生時代～古代にかけての竪穴住居跡の建築材では普通に用いられている。今回分析を行なった32号住居跡でも、建築材には強度を重視した用材選択が行なわれ、クヌギ節が多く利用されていたと考えられる。

西原大塚遺跡では第9地点でも樹種同定が行なわれており、弥生時代後期～古墳時代前期の61号住居跡でクヌギ節が4点産出している（藤根 2009）。32号住居跡と61号住居跡の同定した試料では、共にクヌギ節のみが多く産出しており、西原大塚遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期において強度を重視した用材選択が行なわれていた可能性が高い。

年輪計測では、年輪幅の狭い樹種が多くみられたが、年輪幅の広い樹種もわずかながら確認できた。年輪計測については、西原大塚遺跡に近接する城山遺跡第59地点で分析が行われているが、弥生時代の住居跡については分析が行われていない。今回の弥生時代後期の例に比較的時期に近い城山遺跡の古墳時代の炭化材の同定結果では、クヌギ節とコナラ節が多くみられ、年輪数の計測では、5世紀末～6世紀前葉の住居跡では年輪幅が比較的広い材がみられ、6世紀前葉～中葉の住居跡では年輪幅の広い材と詰まった材が混在している状況がみられた（小林 2011）。

一般的に、植生環境の観点では年輪の詰まった材は成長が悪く、年輪幅の広い樹種は反対に成長の良い樹木であると考えられる。また木材としてみた場合、年輪の詰まった材は年輪幅の広い材と比較して耐朽性や強度が落ちるといわれている（浅野 1982）。西原大塚遺跡の弥生時代後期32号住居跡では、遺跡周辺に生育の良いクヌギ節がある程度みられたが量的に少なく、耐朽性があまり良くない成長の悪いクヌギ節も建築材として利用していた可能性が考えられる。

試料No.	出土遺構	遺物名	種 類	樹 種	残存半径 (cm)	残存年輪数	時 期
1	32号 住居跡	炭1	建築材	コナラ属クヌギ節	—	—	弥生時代後期 ～古墳時代前期
2		炭2	建築材	コナラ属クヌギ節	1.5	11	
3		炭3	建築材	コナラ属クヌギ節	1.3	9	
4		炭4	建築材	コナラ属クヌギ節	3.3	22	
5		炭5	建築材	コナラ属クヌギ節	—	—	
6		炭6	建築材	コナラ属クヌギ節	5.5	19	
7		炭7	建築材	コナラ属クヌギ節	3.2	7	
8		炭8	建築材	コナラ属クヌギ節	—	—	
9		炭9	建築材	コナラ属クヌギ節	5.5	25	
10		炭10	建築材	コナラ属クヌギ節	1.3	4	

第4表 西原大塚遺跡第169地点出土炭化材の樹種同定結果

[引用・参考文献]

浅野猪久夫 1982『木材の事典』朝倉書店

藤根 久 2009「Ⅲ樹種分析（1）西原大塚遺跡出土炭化材の樹種同定」『西原大塚遺跡Ⅲ 西原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』埼玉県志木市遺跡調査会

小林克也 2011「Ⅲ．城山遺跡から出土した炭化材の樹種同定」『志木市遺跡群19 城山遺跡第59地点』志木市の文化財第45集 埼玉県志木市教育委員会

版 圖







1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 表土剥ぎ後風景



4. 遺構確認作業風景



5. 調査区全景





1. 32号住居跡



2. 32号住居跡炭化材出土状況



3. 32号住居跡土層断面A-A'



4. 32号住居跡区画整理第1地点



5. 3号掘立柱建築遺構





1. 3号掘立柱建筑遺構 P 1



2. 3号掘立柱建筑遺構 P 1 土層断面



3. 3号掘立柱建筑遺構 P 2



4. 3号掘立柱建筑遺構 P 2 土層断面



5. 3号掘立柱建筑遺構 P 3



6. 3号掘立柱建筑遺構 P 3 土層断面



7. 3号掘立柱建筑遺構 P 4



8. 3号掘立柱建筑遺構 P 4 土層断面





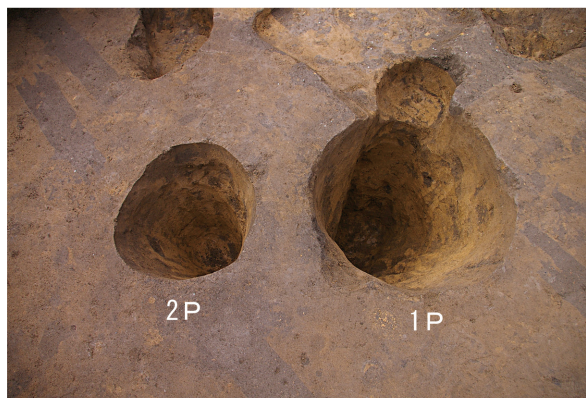
1. 3号掘立柱建築遺構 P 5



2. 3号掘立柱建築遺構 P 5 検出状況



3. 調査区南西側近景



4. 1号ピット・2号ピット



5. 調査風景



6. 32号住居跡炭化材試料採取風景



7. 測量風景

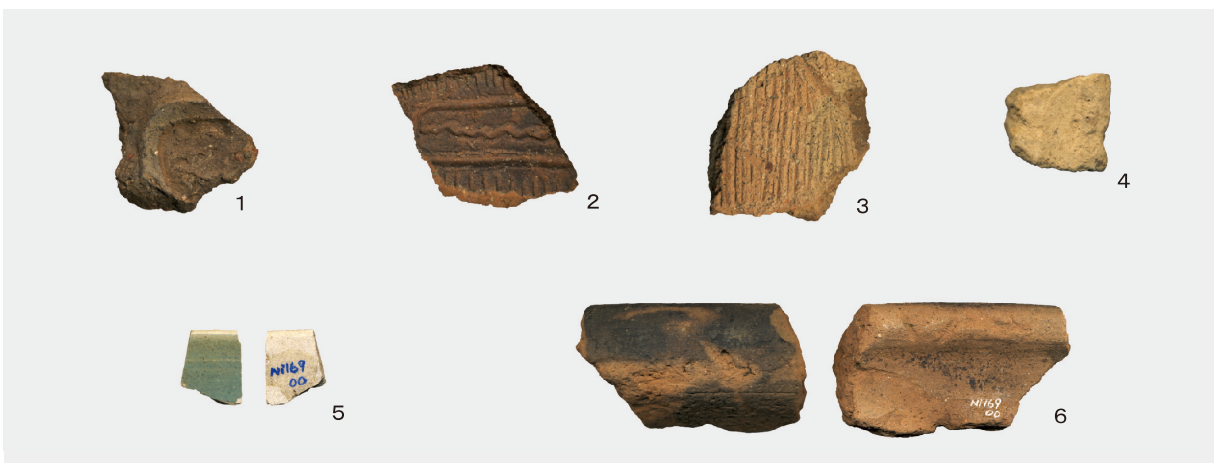


8. 埋め戻し作業風景



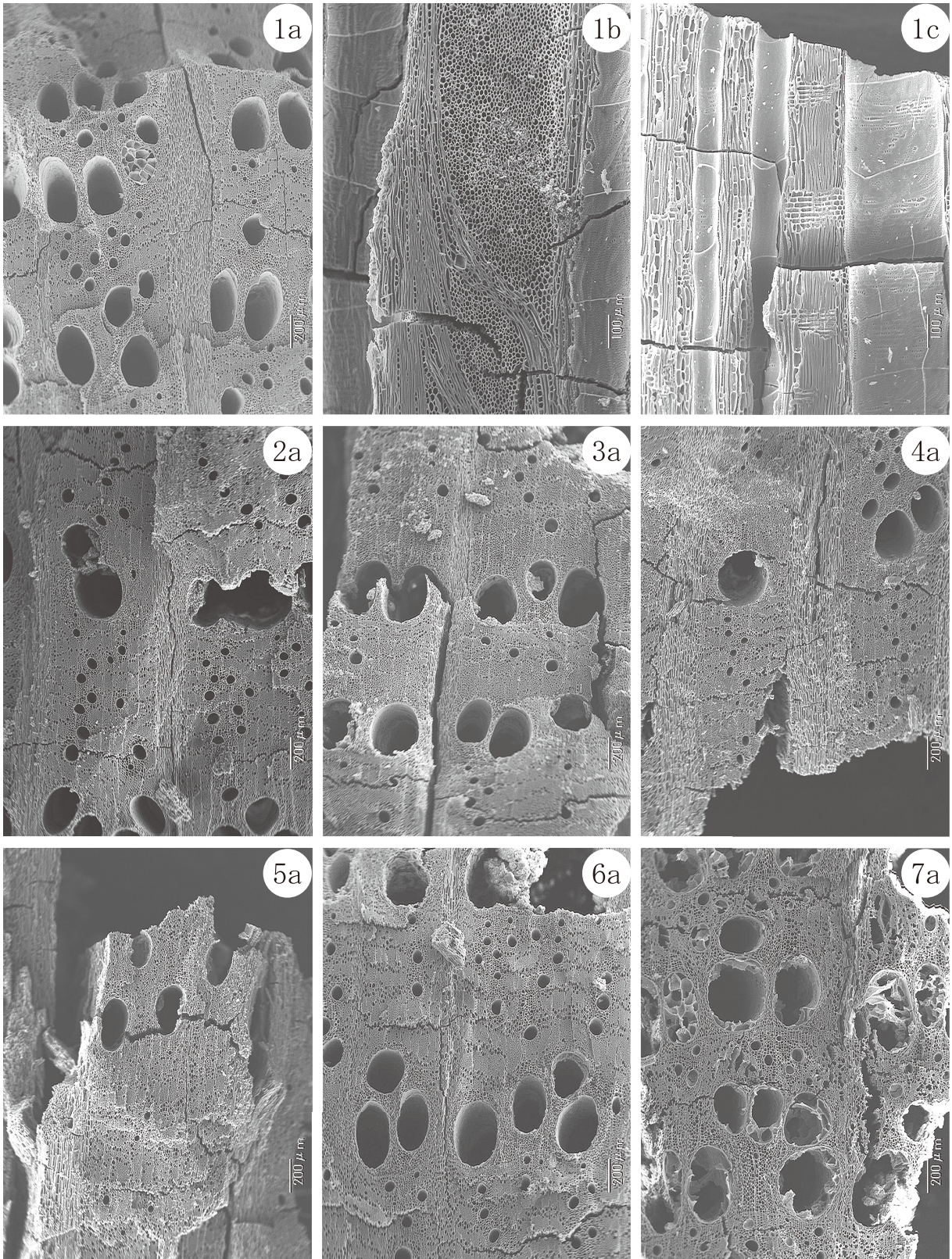


1. 32号住居跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物





1a-1c. コナラ属クヌギ節 (No. 9) 2a. コナラ属クヌギ節 (No. 2) 3a. コナラ属クヌギ節 (No. 3) 4a. コナラ属クヌギ節 (No. 6) 5a. コナラ属クヌギ節 (No. 7) 6a. コナラ属クヌギ節 (No. 9) 7a. コナラ属クヌギ節 (No. 10)  
a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはらおおつかいせきだい 169 ちてんまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書名	西原大塚遺跡第169地点埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財			巻次	第47集			
編集者	徳留彰紀 尾形則敏							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成24(2012)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第169地点)	しきしざいわいちよう ちようめ 志木市幸町4丁目 8132番の一部	11228	09- 007	35° 49' 20"	139° 33' 46"	20101004 ~ 20101013	90.00㎡ (302.94)	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第169地点)	集落	弥生時代後期から古墳時代前期	住居跡 1軒	掘立柱建築遺構 1棟	土器	掘立柱建築遺構は亀甲形のタイプで、検出例は市内では西原大塚遺跡のみで、本例で3例目である。		
要約	<p>西原大塚遺跡は、武蔵野台地北東端の縁辺に形成された、旧石器時代から近代までの複合遺跡である。共同住宅建設に伴い、平成22年度に第169地点として発掘調査を実施した。本書は、その成果をまとめた発掘調査報告書である。</p> <p>今回検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡1軒(32Y)、掘立柱建築遺構1棟(3T)である。32Yについては、区画整理第1地点の調査時に西側一部が検出されていた。掘立柱建物跡については、区画整理第1地点で検出されたピット1本も含めて同一遺構とした。これにより、これまで検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡560軒、掘立柱建築遺構3棟となった。</p>							

志木市の文化財 第47集

## 西原大塚遺跡第169地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発 行 日 平成24(2012)年3月31日  
印 刷 株式会社 白 峰 社